

2015年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアーレポート

「現地を訪問して想うこと」

ツアー参加者氏名：土 敏夫

卒業年： 1994年 卒業学部：文学部史学科日本史学専攻

参加コース A 福島県コース

私は、東日本大震災による被災地域の災害復旧事業等に従事するため、2015年4月から宮城県石巻市役所に派遣され、現在は浸水危険地域として居住が認められなくなった地域に復興関係都市施設（公園等）を整備する部署にて勤務しています

派遣された石巻市は、津波と地盤沈下による被害が甚大で、死者・行方不明者を合わせると約3500人、浸水面積は73平方キロメートルとなっています。一方、今回参加した福島県は、津波等の被害に加えて、原発事故による放射能汚染により今なお震災被害が進行中です。

石巻市に赴任してから、できる限り休日は東北の各地域を巡ろうと考え、いろいろな観光地等を訪問しました。しかし、福島県の東部地域を避けていたのかもしれませんが。もちろん、車を保有していないことから交通アクセス（JR常磐線）が遮断されていることから訪問できないという物理的な障壁はありますが、目に見えない放射能に対する恐怖心も大いに関係していると思います。

そのような折、普段は届いても開封さえしない母校校友会の会報を晩酌の慰めに眺めていたところ、「東北応援ツアー」の存在を発見しました。このツアーは、「全国の立命館大学校友に東日本大震災について学び、被災地の現状を知ってもらうために企画されたものであり、一般に行われている観光目的のツアーとは異なり」、「校友の代表として被災地を訪問する趣旨」を理解のうえ参加することが求められています。昨年までであれば参加することを躊躇していたのですが、今であれば参加資格があるのではないかと考え、申込みをいたしました。

地元から石巻市に視察目的で来られる方々を案内する機会がありますが、どうしても復興が進んでいる案件を視察先に選びがちです。しかし、このツアーでは、まさに現状の「一端」を知ることを目的としていました。特に印象深いのは浪江町のまちをバスの車窓から視察したこと。倒壊したままの建物や草木に覆われた家屋、津波に流され基礎だけ残っている痕跡… 時計の針が止まっているという表現はこのためにあるように思いました。

石巻市では、今なお震災の爪痕がいたるところに見受けられ、市民の方々の心痛はあまりありますが、震災から4年9か月が過ぎたことから、当初の混乱状態は落ち着きつつあり、新しい生活へと歩んでいます。特に復興住宅の建築や道路の改修、JR仙石線・石巻線の全線開通など目に見える復興成果がその要因だと思います。

一方で訪問した浪江町では、ようやく一時帰宅が許されるようになったとはいえ、日々の生活を営むことができず、避難生活がいつまで続くのかさえ見通しが見えない状況です。

マスコミ報道にてある程度の情報を入手しているとはいえ、自分の眼や耳で実感する印象とは全く異なるものでした。

このような思いを抱くことができるのは、ツアーを企画していただいた世話役の方々のご尽力にほかなりません。一般では立ち入ることができない箇所視察や復興の最前線に立たれて方々の生の声をうかがう機会に恵まれたからです。

私の石巻市での生活は残りわずかとなりましたが、このツアーに参加することで、この地を第二の故郷にすべく少しでも復興に貢献するとともに、一人でも多くの地元の方々と交流を深めていきたいと再認識させていただきました。

来年度もこのツアーに参加させていただきたいと考えています。